

黒崎藤右衛門事蹟調書
戊辰役戦争経歴実談

故 黒崎章弑氏提供

明治三十九年十月二十六日午後三時

明治卅九年十一月廿六日午後三時

黑崎雄二君戊辰役戰爭經歷實談

山田武八郎速記
故黑崎章三氏提供

山田武八郎速記

明治三十九年十月二十六日午後三時一同着席黒崎雄
二君臨席

一黒崎雄二君戊辰戦争經歷實談附寺師幹事紹會の挨拶○
同君幼時の生立并親父黒崎藤右衛門君の事○水戸へ往
時正好の黨争より自然正確の歴史編述なしとの事○同
君一族住村退去前後の情况及同君僕人と留守に残られ
し事○同君旅金を江戸小間商某に借りて旅装出立あり
し事○同君白川にて水戸人市川三左衛門一派に出會同
行ありし事○水戸一列勢至堂關門にて會津藩と交渉し

同勢一千四百卅五人會津に入られし事○會藩の求に仍り市川始両三人變名し各々其配下を定えし事○同君寛助太夫に附屬して越後に趣け佐渡に航せられし事○佐渡滞在中越後口戰爭の報を傳へ歸港與板に着陣戰鬥ありし事○同君等一行越後の戦況に仍り三條に戦ひ加茂に退去せられし事○一行村上城下に入り自炊中官兵より襲われ黒崎藤右衛門君負傷せられし事○同君一行會津領津川を経て若松城下宿陣ありし事○同君宿門を出て斥候の往復頻繁なるを見て傍人に其事由を聞われ奉事○猪苗代陥落の報を傳へ會津侯父子出馬市内一時は沈黙をし事○同君年少の爲め金を賜ひ進退を任せられしも強て奉公を誓ひ白虎隊に加はられし事○同君日向山

よ出陣し夜間密行者を訊問に及ひしが後日に至り川村
純義君なぞしを聞かれし事○同君一行と分かれ田島在
に遁れ原田某の軍情を傳へられし事○同君保科家の
人
數と合し再び會津城に入り水戸人と合せられし事○同
君入城前東照宮社前よ一泊し目覺め傍人悉く死屍かり
し事○城内進撃兵日々減少し糧食乏しく玄米を食ひし
事○水戸一行城内の究狀を願みて進退を協議し水戸よ
歸り水戸先夫人貞芳院に頼りて朝廷へ謝罪よ及ぼんと
決せし事○一行會津侯に辭別し養君若狹守を誘ひしも
義理を諭して之を斥せられし事○一行會津士佐川勘兵
衛に送られ高田村に宿し同所にて戦闘に及び黒崎君敵
將を撃たれし事

寺師君(宗徳) 今日の水戸の黒崎雄二君が御出席で、同君が戊辰戦争の経歴實話を主とて水戸家内亂から、引續き會津其他に轉戦になりました。結局再び水戸へ歸られました。下總の八日市場で苦辛をされた實歴の御話を御記憶丈けださうでありませんが、御話になるといふことでございます。是れは珍しい御話で、水戸家の御話の一方丈けは始終能く承ります。會津に立退になりました一派の御話は、往々世の中にも漏れたることも多い様でございます。幸ひ同君の幼年の時代ではございました。千變萬化の際に種々御經歷のありまじう次第で全くの實歴の御談話でございます。今日幸ひ御出席でございますから、其の大要を伺ひます。積り、どうか左様御承知を願ひます。

黒崎君(雄二) 私は本日史談會へ出しまして、寺師幹事より只今御披露下さいました通り、戊辰の水藩の事蹟の事よ付て、一應の話をして呉れと云ふことでございました。それ故當時は私も十三歳でありまして、至つて未熟な時代でございましたが、聊か記憶の一端を御話を仕様と思つて、今日出席した様な次第であります。私は水戸領北部の久慈郡大子といふ所の一寒村のものでありまして、父は黒崎藤右衛門と申

します其の三男幼名大三郎と申しました、それで私の父が烈公に選拔されまして其地の文武館の學監を拜命しました、其の當時七歳の時に至つて、私が父の膝下に於きまして聊か孝經を讀みました位で、間もなく元治元年甲子國難の際に父が戰死いたしました、其故一定の學問と云ふものも無いのであります、故に甚だ前後揃はぬ點がありませうが宜しく其邊の御聽取りを願ひます、

此の水戸藩の事蹟に付きましては、私も實に不思議で堪らぬ處とが數々ありまして、今日水戸人に尋ねて見ましても、一つとして是ぞといふ安心の出來る歴史が無いのでございます、何ぞといふと、諸君も御存知でありませうが、水藩の久しい前より二派に分れて居りまして、正奸の名を立てまして、黨派の争がありました故に、今日小梅の水戸邸に於ても、確たる御調も無からうと私は存じます、又之れを一々何人が説明が出來るかと云ふ御尋ねがありましたならば、水戸人に於ては恐らくの要領を得た御話の出來ぬかと考へますが、私が聊か記憶の所を一寸御話し致します、

抑々慶應四年二月十一日に私の宅へ水戸の立原新介から(立原は私の親戚續きに

なつて居ります。夜中に使が参りまして、水戸家の者は残らず城下を引上げました。鈴木石見守といふ國の城代がありました。之に伴はれて佐藤國齊寛助太夫市川三左衛門朝比奈彌太郎杯が主でございまして、水戸から五里隔つて居る太田といふ町へ引上げました。一刻も斯うして居られぬ急の場合であるから、早速家財を取纏めて、栃木なり野州路へ御逃げなさいと言つて來ました。意外の話でありました。が、それで私の兄共杯は旅装を整へて、野州地方へ出發しました。又家族も残らず連れて往きました。私ハ僕一人宅に残りました。何も汝ハ幼少であつて何處へ往つたかと申したら、只分らぬと申せと云ふ。兄の命を受けて宅に留守居をして居ります。翌十二日の朝でございませぬ。出入りの者が参りまして、早くお逃げなさいと云ふ坊さんも召捕にありませぬ。お逃げなさいと、辱を立て再三再四申します。私も意外に思ひまして、兄の命であるから家に居らうと思ひましたが、出入りの者が頻りに勧めますから、己むを得ず旅装を致しました。旅装をしますと付ては更に路銀の手當がございませぬ。只今御話しますと、通二丁目に柳屋と云ふ小間物屋があります。此の支店が私の郷里よりありまして、此の主人なる者が私の父の歌道の門人

でございました、そこで早速支配人を呼びまして、直ちに五十金を調達いたせと申しました所が、何か頂戴いたすものがなければ御用立てるおとは出来ぬ、何も御預りの物が無いのに御用立ては出来ぬといふので失望しました、それでは土藏に何かあるだらうから、御前達が持て往くが宜い、併し具足や武器杯に手を附けてはならぬ、丁度十二月で藩主から賜はつた祿がありまして、私ハ從來農家でありまして祖先より譲りの反別を持て居ります、それで其の收獲した俵を殘らず柳屋の支店に持て参りまして、五十金を調達し、其の金を持て家僕を連れて野州路へ出立致しました、所謂會津の藩が東京を引拂ひ京都を引拂ふた者が、續々として國へ戻るといふので、それに合して會津に落ちたら宜からうといふ聊か氣が附きまして、白河といふ所迄参りました、参りますと、丁度水戸から立退れた市川三左衛門、佐藤圖實、朝比奈彌太郎、寛助太夫といふ家老が、引連れて居りました、人数凡そ七八百もありましたらうか、それと白河で合しました、是れから會津へ往くから俱に往くが宜からうと云ふので、私は寛助太夫に合しまして會津に往くに付きました、勢至堂の關門がありまして、中々水藩の者を會津へ入れることは出来ぬと云ふことでありま

す、あゝよ三日滞在をして居りました、其間に若松城下へ交渉いたしまして、水戸を出立し、事柄をいづれ述べたのでありませう、其の當時の當局者の許しを得まして、會津へ乗込むといふことよくなりましたのであります、其時の人数の調が一千四百三十五人と記憶して居ります、それを何せ今日記憶して居るか、と云ふと、十人づゝを一組にして居ります、それ故一千四百三十五人と云ふことを記憶して居りますが、うれで若松へ参つて若松へ宿泊が出来ませぬで、板毛と云ふ所へ宿泊をしました、若松から三里程隔つた所で、其處へ泊りした時に、若松から佐川勘兵衛といふ人でありました、之に鈴木丹下と云ふ兩人が参りまして、水藩は今日残らず御名前を改正して欲しい、左も無ければ御取扱に甚だ困るに依て、名前を残らず變へて呉れど云ふことであります故に、残らず千四百餘名の者が名前を變へることになつた、其の時には是は諸君も耳新らしい御話であります、市川三左衛門は芳賀三左衛門と申しました、佐藤圖書が信夫傳衛と言ひました、寛助太夫が田村兵衛と申しました、朝比奈彌太郎が堤守衛と改めました、さうして會藩へ届出ました、それに附屬する者の名前を一々改めることは煩はまうございませうか、それで先づ四名の

家老の人達丈け改姓して他の者は舊姓を呼びました方が宜からうと云ふので、其儘何の何某の芳賀附であるとか堤附であるとか、田村附であるとか、信夫附であるとか云ふことにしました、其時私は鈴木丹下と云ふ若松の使者が水戸藩の附添でありまして、之と共に越後の水原と云ふ所へ参りまして、水原から新潟へ参りました、新潟から寺泊に出まして佐渡ヶ島へ渡つて、佐渡ヶ島の金銀を若松城へ早く回収すること、鈴木丹下より筧助太夫、名田村兵衛に依頼であります、そこで私杯が佐渡ヶ島の第一のちきの島と云ふ港がございます、其處へ着きました、其時丁度佐渡の相川と云ふ所に陣屋がございます、此處に有名な金銀山で、幕府以来の金坑でありまして、それへ参りました所が、既に昨夜佐渡奉行は御用船へ乗つて越後の高田へ出發したと云ふことであります、佐渡の陣屋を調べましたが、何一つ金塊がございませぬ、只天保錢が庫に貯蔵してある、恐らく算ふる事の出来ぬ程でありました、それで佐渡の警衛を任せられました、佐渡に居る事五月二十二日の日迄同所に居りました、さうしますと云ふと越後の高田に於て官軍の衝突があるに依て早く越後路へ引上げぬと、佐渡ヶ島に渡航した者の再び戻る事が出来ぬから早く歸

れと云ふ使者が参りました。そこで私共は二十四日に佐渡ヶ島を出立しました。さうしますと、既に高田が戦さになり、相崎、あの邊は海岸線でありますが、日々の戦でありました。其方を受持ちました。兵は桑名の松平越中守の御人数が出て居りました。これが轉戦した。非常に疲れたから、それ故私共は與板と云ふ所へ参りまして、與板で久しい事戦つて居りました。それから長岡へ轉して長岡と與板の間で戦ひました。丁度七月二十五日と思ひますが、長岡が落ちまして、一度び回復したことがありませんが、僅に三日の間、うれが支へる事が出来ませぬので再び官軍の手を取られたと云ふことであります。其内新潟が破れたと云ふ通信がありました。長岡が破れ新潟が破れた以上、(七月二十九日)越後路には一日も居る事が出来ぬから、早く越後路を引上げなければならぬと云ふので、與板の會戦を止めまして、三條へ参りました。三條へ來ますと、長岡、庄内、米澤、天童の藩が居りました。會津は固より居りました。それで三條の戦は、朝かゝ夜の九時迄包圍されましたものでありますから、一方を切抜けなければ出られませぬので、已むを得ず加茂といふ地方へ切抜けやうと云ふことに一決しました。其時が夜の十一時でありました。漸く活路を得まして加茂

へ向ひました、三條から加茂と云ふ所迄は六里程あります、加茂へ参りまして食事の支度をして匆々會津へ引上げると云ふ事になりました、村松と云ふ所へ参りまして、村松と云ふ所は是れ堀さんの御領地であります、さうすると晝間一戸として店を開けた家が無いのであります、それで一人も負傷した者は居りませぬ、我々が参つても炊出しをする者も居りませぬ、いづれへ往つたかと云ふと皆逃げで居らぬ、それ故名々勝手元へ往つて米を持って來て炊きまして晝飯を喫しやうとする所へ裏の窓から發砲を受けまして、それで意外千萬で驚いて村松を立つた、それ以前日既に官軍が遣入つて居つたと云ふことであります、それを知らぬで晝飯をして居つたと云ふことであります、其時分私の兄藤右衛門は足元へ負傷しましたが、聊かの事でありました、會津へ山越しをする積りで、津川と云ふ所へ参りました、山川力藏と云ふ人が三百の兵を率ゐて津川の川口右の手を袍帶して陣をして居りました、此人が多分山川健次郎君の御實兄であらうと思ひます、之に合しました、其時鈴木丹下も一所でございますから、水戸藩は長らく越後路からの轉戦で實に御難儀であつたらうかと、最早我々が津川に於て喰留めるからこれから若松へ往つて

休息をなさる様に、本營の方へ早やを以て申立るであらふから、暫時其の指令のあ
る間、津川に滞在して呉れる様にと云ふので、津川と云ふ所へ滞在して居りました
さうしますと、直ちに會津侯の御許容があつたものと見へまして、若松へ參る様に
と云ふ御沙汰で若松へ參りました。田村兵衛の人類が市ノ瀬要と云ふ邸に居りま
した。其處が私共の宿になりました。其處に一夜泊りました。さうして翌日は若松へ
遣入りました。若松の城下は中々繁華な所でありました。それで如何せん五月の二
十三日に佐渡ヶ島を出まして以來、髪を結ふの事もございませぬ。始終野に臥し山
に伏して居りましたものでありますから、若松の城下へ來て見ますと、醜るしくも
あります。かゝる服裝でも改め様ではいかど、知人と手を取りまして門前へ出ま
して袴を仕立てやうと思ひますと、若松城下へ頻りに使者が參ります。餘り其の使者
が劇しい故に再び尾敷へ戻りました。門番に斯の如く使者の參るのは何故かと尋
ねますと、毎評定所へ各地方の御使者でありますから、格別異状はありませぬとい
申します。又門前へ出ますと、驛馬に跨つた使者が續いて來ます。餘り不思議であり
ます。かゝり又再び市ノ瀬の屋敷へ戻りました。居りますと、程なく城中から喇叭で會

津宰相、桑名越中守様と、私の國から御養子にありました水戸家の與九郎丸様、これ
ハ若狭守と申して、此の御三方共に御出陣と云ふことでありました、それ故残らず
市中は商買所であく、戸を鎖し家財を片附けるといふ騒ぎで、僅か一夜の間であり
ます、それがどうしたかと言ひますと、猪苗代の陣屋が破れまして、若松を隔つこと
僅に五里しかありませぬから、火の見へ登つて見ますと猪苗代の陣屋が焼けて居
りますのが見へます、是は斯うして居る所でない、早く出陣しなければならぬ、そこ
で瀧澤峠と云ふ所迄一里半あります、私共の参りました晩は丁度雨が降りまして
私の人数ハ三十五六人で、私ハ當時少年でさう云ふ所の望んでも出ましたのであ
ります、所が汝は長らく越後路の實戦もやつたので最早斯く切迫し、以上は、孰へ
なり進退せよと御手許から五十兩の二分金を頂戴し、孰へ進退せよと申しても
良心に問ひまして出来ませぬとでありますから、何事でも君に身を捧げて孰へあ
り出陣の仰せあるとを願うと申し、所が、白虎隊の一部と合しまして、日向山と云
ふ所、瀧澤峠から十丁程隔つた峠がございまして、其方へ加はりまして出まして、丁
度雨の降る晩であります、其時山の麓へ下りまして農家の軒の下に立ちまして筒

を逆さにして腋を附いて休んで居ると夜の明け方でありませぬ、是れ珍しい御話だらうと思ひますか、一寸申上げますが、其時私の前を笠を被まして刀を一本差しまして横切つて往く者が一人あります、怪しからぬ者が我輩の前を通行する、何人であるかと尋ねました、私に此の地方の肝煎でございませぬ、肝煎に相違ないか、ハイと申して往つて仕舞つた、丁度夜の明け方でありませぬ、霞が掛りましてズツと雨が小止みになりますと、諸處で空砲の音が致します、是は夜前の雨を筒拂ひに空砲を打つことである、當今の戦さとは違ひまして、雨後は鉄砲の中を掃除したものでさうしますと、段々其音が近いので不思議に思つて居りますと、間もなく三丁程隔つた所で、實彈射撃と喇叭の聲がした、裏山に登つて見ると、若松城に火が掛つて居りました、其の笠笠を冠つた人が何人であつたかといふと、是は河村純義伯であります、前年私が河村伯に遇つて話した所が貴様であつたかと言はれぬ、河村伯が若松城攻撃の時に、笠笠を着て繰込んだと云ふことを聞きました、そこで白虎隊と分れました、城を差して参りますと、中々火が掛つて居ります、表御門へ出ますと門を鎖しまして、中から實彈射撃をして居る、私は今日白虎隊と合して出張しませぬ者

である、どうか門を開けて呉れと申しました所が、就の隊と雖も開けることゝ成りませぬから、随意に御進退なされと申しました、うれから振返りますと、僅か一丁内外の所に澤山な官軍が居りまして、左右から發砲しまして、如何共進退谷まりましたかゝ、御堀へ飛込みました所が、馬と人で歩くことが出来ませぬであります、それで日の暮れる迄御堀の中をどちりともなく歩きまして、南御門と云ふ所がありました、此處が人通りが無いと云ふのを見届けまして、成る邸の縁の下に潜伏して居りました、そこで一夜過ごしました所が、日々の砲戦でありますから、家財は誰も片付ける者はございませぬ、殆ど皆焼けました、私は其の晩人の隙を窺つて、拔出しまして、田島と云ふ所迄落ち延びました、其時に田村兵衛初め私の兄水戸の者に残らず分れまして、私一人になりました、田島へ参りまして居ると、今どうあつて居られませぬか、原田對馬といふ人が會津にありまして、此人が三百五十名の兵を引連れ、三度小屋と云ふ所へ居ります、此處ハ栃木縣と會津の境で、確か蘆原附近であります、それへ合しました所が、會津の模様を問はれました、そこで一々右の有様を述べました、所が原田氏も意外に驚きまして、最早致し方が無いから、出羽の庄内へでも落ち

て、共に再び爲す時もあらう、併し空しく三百の兵を以て城中の有様を知らず、庄内へ落ちるのも遺憾であるから、今一夜忍んで城の有様を聞かうと、其の時下總の保科の御人数が十五名居りました、これと私一人十六名一所になりました、そこで田島に宿泊して居りますと、同處の肝煎庄屋のことと云ふ者が視察をし、結果、南御門が今朝より開いて居るか、其方ならば出入が出来ると是迎も白晝は出入は出来ぬ、夜分になつたら出入が出来ると云ふことであります、それ故わざと日の暮れるのを待ちまして、城中へ道入るだけの時間を拵へまして、参りますと、丁度若松城に對峙しまして、おだ山と云ふ山があります、此處に砲臺を築いてあります、此處へ参らぬと南側の御門を通れませぬ、其の臺場の所を通る時は、残らず無言と云ふ號令で、皆抜き足で臺場の下を通りました、南御門を通りまして、會津の三の丸と云ふ所に東照宮の廟所がありました、それへ今晚の御出を願う、明日は水瀧の水瀧、保科は保科の隊に御案内をされると云ふので、残らず會津の原田の人数も三の丸の東照宮の社前に一泊しました、さうしました所が、私の非常に疲れて居ります、それに氣が緩んで居りますので、緩くり眠りました、翌日の朝の九時頃迄寝て居りました

それから目を開いて見ると皆寝て居ります、私は起上りまして皆さん起きなさらぬか、モウ時間であると申たが、一人も起きる者が無い、能く見ると皆死人でありませぬ、私の死人の中に寝て居つたと云ふ有様で、他の者は會津附き、保科の保科附きになつて皆其方へ參つた跡であります、そこで私の起出しまして、昨夜寝過した、どうか水藩の方に交渉して引渡して呉れと門番に頼みまして、それで初めて篁助太夫初め、朝比奈彌太郎、佐藤圖書、市川三左衛門附の人々に遇ひました、三の丸に於て私の兄にも遇ひました、皆一同無事に城中に居ること、一週間の餘でありましたらうと思ひます、さうしますと、日々進撃々々と云ふことで各隊が繰出します、何せそうなるかと云ふと、糧食が城中にございませぬ、それで私杯の喰べまじふ米と云ふものが、所謂玄米で、搗かぬ米であります、之を炊いて生活をして居ります、其内に三の丸より二の丸へ移つた、進撃に出た者は一人も戻らぬ、往つたかといふと、更に行衛が分らぬと云ふので、段々人員が減ります、斯うなつゝ以上は、會津の此城は持堪へることの出来ぬ故、降伏の曉は、前年武田耕雲齋が越前の敦賀で御處分になつた例もあるに依て、此轍に再びなるに相違ない、何が策があるだらうと云ふ、二の

丸に於て協議が有りました、何か意見がある者の申出る様にといふことで、各の意見を尋ねましたが、誰とて名案も無い、日々城中は糧食に逼迫して居る、又日ならず降伏するだろうと云ふ噂もあります、最早逃れる道の無い以上は、一度び水戸へ戻つて貞芳院様と云ふ、有栖川宮か、烈公へ降嫁になつゝ方があります、是は七年前に逝くなられましたが、此の御方の縁故に依て天朝へ御詫をしやうと云ふことに協議が決まりました、そこで會津宰相の目通りへ四人の家老が出まして、御暇乞を致しました、其時若狭守様を御預り申して水戸へ戻らうと云ふことを御請ひ申しました所が、若狭守様の仰せに一旦籠城と定めたものを此の有様を見て汝等の爲めに本家に歸ることは出来ぬ、併し汝等が今日迄盡したことを空しく袖を振つて斷はると云ふことも出来ぬが、此意を諒して呉れといふ、御言葉であつたさうでございしました、それ故若狭守様の御供の出来ぬで、佐川勘兵衛が若狭守様の代理として若松城を出る事になりました、其時に若松か、三里程隔つてありました所の高田村と云ふ所迄、佐川勘兵衛と云ふ人が見送りをすると云ふことで、高田と云ふ所へ出ました、さうしますと高田といふ一村落へ参りますと、丁度其日も暮れました私

共の僅か三十人斗りて熊野神社の社内に泊りました、ヌルと夜の明け方であります、遠く喇叭の聲が致し大鼓の音がするモウ敵が見ゆたに相違ないと起出ました、夜の引明けでありますから遠くも見えませぬ、段々近くなりますと僅か三十間程前に堤防があつて其の真ん中に川があります、其堤防の上を人数が参るのでありませぬ、ソレ敵が見ゆたといふことで三十人の者が一人の陣所の所へ通知に参り他の者は準備をすると云ふ様なみとで、其の堤防を目掛けて撃ち合ひました、撃ち合ひましたところが、向ふからも劇しく撃ちます、其處は僅かの森であります森を狙ふて撃つことでありますから、彈丸が能く参ります、是は逆も森の中に居つては危険である早く田の中に出て藪の積んである其の藪の中に、一人乃至二人隠れて敵を狙つたが宜からうと云ふので、藪の蔭で、土手を目掛けて戦ひましたところが如何せん、向ふは土手の蔭で撃ちます、こちらは藪づとの中で撃ちますから、どうもうまくいかぬ、稍程あつて土手の上に現はれまして撃て、といふ號令が僅か十五六軒先でします、それを目的に、私が出来もせぬ癖に、腕試しに撃ちました、撃ちました所がハタと土手の下に脆く落ちました、締めたど小銃を捨て、刀を抜いて飛ん

で往きまじふ所が前に堀があつて水があります、其處へ飛込みましたが如何せん
前の土手に枯柴がある、其蔭に三四百人の人が居て代る／＼撃ちます、進退谷ま
りました刀を振上げた儘打ち落しましたが、是は御親兵の或る隊長でありました、う
れは森要と申します、それへ斬り附けよと云ふ様な有様で、うれ故に三百人が狂狼
いたしたものと見へ、まして、其處を去りました、其跡へ私の兄や四五十の者が私に
加勢をして参ると云ふので、先づ其時の暇さへ小なる者と雖も、大勝利を得ました
今日惜いのは其人の刀を八日市場まで持て参つて、私の刀も一所に品中に埋めて
ありますが、今日探しても分りませぬ賊に遺物であります、(以下次号)

山田武八郎速記

明治卅九年十一月廿六日午後三時一同着席黒崎雄
二君臨席(續)

一 黒崎雄二君戊辰役戦争經歷實談附同君一列追撃高田村
に至り水戸人小池某の荷物を檢し其備あるを知り退却
せし事○同君同村役場揭示にて大政官と明治の改號を
知り傍人に笑はれし事○同君一行道を轉して間道を経
て水戸に入られし事○更戸にて大田原、黒羽兩藩兵と戦
ひ水戸領小野に至り水兵と合戦の事○同君先頭川船に
乗る同列八名と那珂川を渡り敵兵を追ひ石塚に至られ

し事○同列決死身容を繕ひ事破れかば瑞龍山にて切腹
の盟を締ひて即夜水戸に進入せし事○同君御杉山の戦
にて同志清水恭庵の負傷を助けられし事○同君御杉山
を去り弘道館に赴き兄藤右衛門君の負傷を知られし事
○御杉山弘道館の合戦にて同志死傷七十八名を同館に
集め自殺焼亡しする事○秦宗菴残留者の介錯を爲せし
が後生残りし事并に會津發途の人員二百五十名と注せ
し事○同志力盡きて水戸落去に當り瑞龍山自裁の盟を
替へ北海道落去に變せし事○同列潮來に至り屯兵に要
撃せられ僅に銚子に達し高崎藩兵に扼せられたる事○
同藩兵と降伏を協議し黒崎君一行は脱刀條件を肯せさ
りし事○一行の談判者として差遣せし大森彌左衛門不

意の砲撃に斃たるより一同決意銃子侵入に及はんとせし事○高崎藩兵指揮者某道路に平伏して誤殺の過失を謝し大森の死屍を厚く葬りし事○一行八日市に走り午食中水戸の追兵來り同所の松山にて合戦せし事○同行散亡同君兄弟逃れて登戸より至り舊知に遇ひ農家に頼りて變装せし事○同君左鬢を剃り横向に結髮せしに仍り注意され更し髮結店にて結替たりとの事○同君兄弟某所の蕎麥店にて官兵に誰何せられ店婦助言して免られしも同行片山某は逐電に及びし事○寛某、黒崎君の胴着に葵紋付を着せしを咎めて之れを便壺より棄てられし事○同君一行官兵の訊問を受け上州鳥山在民の成田詣と辯せられし事○同時より實兄藤右衛門氏の懷中を調べ在

中の錦の切の出所を訊はれ守袋と辯せられし事○同君等の業体を調へ米商なぞと辯し近江屋米預の証文を示し疑を解かれず事○同君兄弟諸所より流寓せられ藤右衛門氏は終に客死せられし事○同君志を立て米園に渡航し彼地にて身を起し後年歸朝し及びし事

黒崎君雄三

さうしまして、其勢に乗じまして追撃を致しました、追撃を致しますと一里半程参りますと不思議にも水戸藩兵と出遇ひました、その小池仙太郎といふ人が私の園にあります、後に此人は小池少將といつて、旅團長迄なつて歿くなられた人で、此人の荷物がありました、それ故是は水戸藩が来て居た、是と戦つたに相違なからうといふことで、斯ういふ者と此處で戦つて、水戸城へ乗込む妨げになるから、一刻も早く引上げろといふので、早々其馬を引上げました次第であります、其時でありました私が明治元年太政官の御達といふのが、其村の役場の掲示で知

づたのであります、それ迄は明治といふ事を知らぬで、慶應四年の九月だと思つて居りました、それが明治元年でありました、太政官といふのは何だぞ問ふて甚だ笑ふたことでありました、それ故元の高田へ戻りましてモクさういふ事ならば此處で御別れを致さうといふので、佐川勘兵衛氏の言に任かせまして道を轉じまして御藏入(田島)から山越しで栃木縣の百村といふ所に板室の温泉があります、其處へ出ました、彈藥武器其他の携帶の出来る丈け持つて往くことにして他の幾らす品物を捨てまして、携帶の出来る武器丈けを持ちまして高原山と申します、それが那珂川の水源地百村といふ村であります、其處へ参りまして、百村の百姓の外出を禁じました、あすこの太田原うら二里半程しか無い所で、太田原に官軍の詰所があるうち知れると、水戸に這入るに都合が悪るいから村人の出入を禁じまして夜になるのを待ちまして太田原と作山の間であります、其の奥州街道へ通り掛りまると、江州彦根の早忍籠に出遇ひました、之に様子を知られては通路を妨げるので、作山と太田原の並木で止め置きました、それで更戸といふ所へ参りました、夜の明けると時分であります、これが那珂川線であります、其の處へ参りまして夜の明け方に所

の者に命じて食事と致さうと思つて居りました、スルと黒羽藩が一里隔つた所に居ります、太田原と黒羽と両方の者が追撃に参りました、食事もしませぬで、更戸で僅かの戦をしました、川を渡りますと番水戸領であります、馬頭といふ所へ参りました、これが舊領地でありますから大に力を得ました、馬頭に獄屋があります此獄を扉を開いて是等も一方の人数にするといふことで、それから水戸城を差して参る事にありました、さうしますと小野といふ所がございます、是は水戸から三四里程隔つた所で那珂川の邊りであります、其處へ参りまして川を渡つて往かうとすると、城中から兵が出まして、川を隔つて接戦であります、如何せん限ある彈藥を以て川を隔つて戦ても詮が無い事だから、川を渡つてしやうと議論をしゝが一人も應じませぬ、向ふの烈公の御發明で百目筒といふ砲があります、車轂付で抱え打出來ます、之を四五挺川の邊へ持つて來て打つて居る、此川を渡るのよ船頭が無い、私は幸に郷里が久慈川の邊で子供の時かゝ水に長じて居りますから、ナニ私が漕ぎますと言つて私か第一番に船に乗りまして、其次に松田半左衛門といふ人が御先手物頭を務めた人であります、僅か八名しか乗る者があります、其船に乗り

引上げました、其の時怪我人が七十八名とございました、負傷した者を其處へ皆移し
ました、傷の深淺に拘らず歩行の出来ぬ者は皆自殺して跡は邸に火を掛けて焼
き捨つるの約束でありました、故に私共は逃出て凡一里斗も行き長岡に至て後を
顧みまずと火の手か上りました跡に残りて二三人が介錯を爲し又邸に火を掛け
たのは泰宗庵と申す醫者でありまして清水陸一郎の弟でありました、同人の命を
全ふして逃れました、先刻御話し漏れがございました、若松の城を出る時、二百五
十名と記憶いたしますが、それが途中で散り、になつたと思ひますが、先づ壯健
の者が五十名足らずでありまして弘道館で戦ひつゝ、其處に三日居りました、是亦
糧食もありませぬ武器もありませぬ、毎日抜刀といつて刀を抜いて御杉山へ出る
向ふは弘道館へ出るといふので、三日の間戦つた、其間實に御恥かしい話であるが
トウ、目的も達せず、瑞龍へ往つて割腹すれば今日御話も出来ませぬでありま
せうが、當時五十名の者が残らず一致の議論でありましたが、水戸先君の廟所で割
腹する者は一名も無いのであります、それで榎本鎌次郎といふ人が、幕府の軍艦を
以て北海道に落ちたり、我々も北海道に落ちたら宜からうといふ、山ノ邊邸の協

譲でうれにありまして水戸を出まして銚子の港を差して参りました、銚子迄参ります間に、舊水戸領でありましたが潮來といふ所がおります、潮來に文武館がありました、之れに、其地方の人が餘程厄ろをして居つたものと見え、横内と云ふ所へ来て駆られました、船頭は逃げて船は十六島といふ所へ漕ぎ附けまして、甚だ進退谷まつた譯で、己むを得ず上陸去て小さな船に乗て、銚子の側の松岸へ参りました、松岸で人数を揃へて銚子で船を雇ふて北海道へ落ちるといふ協議でありました、それで松岸へ参りますと、銚子は上州高崎藩の大河内右京亮侯の領地と見へましてこれへ八百人程の兵が出て居つたらしくございませぬ、其の内の三百人が松岸へ敵が参つたといふので参られざした、騎馬に跨がられた指揮役であります、其の人の名前を記臆致しません、これは松平家でお尋ねになれば分りませうが、それと交渉することによりまして、それで愈々松平家に降伏といふことになりました、降伏するに付て、帯刀を渡す譯に、いふ、帯刀を渡さず、此儘降伏したいと申した所が、古來帯刀を渡さずに降伏する者の無いといふことで、中々談判が面倒でありました、其の談判を致しませぬ者が、大森彌左衛門これの御先手物頭を勤めて、これ

が至つて辯者でありますから、之れを使者として松平家に交渉を致しました、其の時殆ど降伏の條件も豫め出来た様に承りつて居りますが、さうして居りますと松岸の町中で砲撃するかと思ふと、忽ち倒れたのであります、それから駆け寄つて見ますと急所に命中したものと見ゆ、大森彌左衛門といふ者が倒れました、そこで意外の事でありますから、我々同志は幾らず銃子までこまから繰込んで其上で進退を決するといふことに又意氣込をまして幾らず騒きました、さうしますと松平家の指揮役たる者が大道に手を附きまして、大小を差出しまして甚だ今日のごとは拙者の不行届であるから、此の罪を謝する、其の上拙者の身体を御處分にあつて何れへなり御進退なさいと申した、我々刀を抜いて迫りましたが、さういふ話を聞くと人間といふ者は存外弱い者でありまして、大きに尤もじやそれなれば自己に進退を致さう、此の死骸を鄭重に葬るが宜いといふので、それで三百の人数が屍骸を戸板に乗せて松岸の町中の某寺に葬りました、門の中に其の儘埋めたぎりであり、ます、それで私も歐羅巴から戻りましてそれだけ墓参りを致して置きました、それと私の刀も探がし旁々往きました、刀は分りませぬ、さういふこと、今日迄

は親族へもこんな話をしたことはございませぬ。餘て史談會からの御希望でありまゝから私の出来事だけは記憶にあるだけはお話し仕様と思つて申上ける次第でありまゝ。それで大河内家の人数と分れまして私共の八日市場へ参りました同所へ参りますと、丁度午時であります。藍の支度をするど云つて居りますと、裏山で砲聲を聞きました。これに怪しからぬじやないか。どれから兵が來たらうか。まさう大河内家の人数が來ることいなかろう。裏山に登れどいつて僅か四十人斗りの者が登りました所が水戸からの百目筒を以て追撃したのであります。それで水藩追撃といふことがわかりました。それで八日市場の高森の松山で土手に乗て戦ひまして、其處で朝比奈知泉の父朝比奈仙右衛門といふ者が歿くかりました。寛助太夫兄弟も歿くかりました。私の従弟の和泉伊兵衛といふのも同所で倒れました。それで市川三左衛門といふ人は東京迄落ちました。私は片山牛之助杯五人組と申しまゝて、一所に東京に落ちて進退しやうじやないかといつて、下總の登戸驛まで参りました。其處へ参りますと、丁度東京の小網町へ夜船が出るといふので夜船へ乗つて往かうといふので登戸の宿屋へ着きますと、此處で不思議にも寛五助といふ

御鷹匠を務める人の親類で、寛三郎といふて會津の三の九に居つた人でありませう。此の寛三郎氏に登戸の宿屋で偶然遇ひました。此の人は喘人体となつて法被股引で居るゝることで私と兄の成田街道の原の中で農家に立寄りまして、兎に角見苦しい風になければ落ちることは出来ぬかと云ふので、自分の衣服を脱ぎまして百姓の股引を貰ひまして、五月の二十三日に佐渡の島で髪を結つてから以來髪は其儘で、モウ十月であります。此の頭で、東京に逃げることに出来ぬから百姓の家内に頭を剃つて貰つた所が頭の中に砂があると見えて剃刀が切れない、私が頭を曲げたものと見えて、横方の頭を剃つて鬘を横向きに結つて、うれい私に知りませぬ、うれいで手拭を冠つて登戸の宿屋へ参ると、寛三郎さんが「此方へ遣入れせうしたのか君の頭はそんな頭で、小網町へ往くと捕まるぞ、今百姓の家内に結つて貰つた鬘が横つちよに向いて居る、成程と氣が附いて早速髪結床へ参つた、流石髪結屋だ今日の散髪屋はどうか知りませぬが、昔の髪結床といふ者は幕府から何か内命を受けて居る者で、さうして風俗を變へるには皆變へたものであるさうであります、私の手拭を冠つて姿を變へて直ぐ出来るかといふと出来ます、そこで手拭を

外づすと髪結床の親父も流石経験のある者で宜しいと今度はスツカリ本當にやうて呉れましよ宿へ戻つてくると寛君がそれで宜い君は商人の風をするなりモウ十月だから東京では白足袋を使う、足袋を買つて来いといふので足袋を買ひに出ました私の足が九文二分で小さき足ですがそれがありませぬので、十文の足袋を二足買ひまして兄の穿きましよが、私が穿くと中々緩いがそれと間に合せまして宿屋に居りますと、一寸御話し漏れがありましよが、登戸へ参る前に何といふ所か蕎麥屋に遣入りまして蕎麥を喰べて居る間、片山牛之助と分れたのでありませぬ、それはどうして分れたかといふと、丁度官軍が見へまして錦の巾切れを附けて居る者が手前達は何處から来たか、私の兄と平然として足を出して居りましたが兄の進退自由なりませぬので私が兄に代つて辨明しましよ、其時片山氏の蕎麥屋の臺所から逐電しました、今に國に存命で居るさうであります、私は調を受けまして出鱈目の事を申して、實は成田不動へ心願がありまして参詣をして参りましたと抜けました、さうしますと其二人の官軍人が成田といふのはどの邊であると尋ねました、蕎麥屋の家内も不思議と思ひまして、向ふが成田でございまして、成田

の街道でございませと申したので、其の官兵も信じましたか、大きに氣の毒であつたと立去りました、其時の嬉しさは今日御話の出来な位なことでありましたさうしますと、蕎麥屋の家内が早く御立ちなさい、勘定は幾らか勘定の宜しうございます、蕎麥屋に追立てられまして、登戸へ参つた様な次第であります、登戸へ参りますと、唯今御話した、寛三郎氏に遇ひましたさうすると、毎夜日の暮れ方に小網町へ船が出るのであります、其時は私共に不思議を打ちまして、夜の九時頃迄船が出ませぬ、何か船都合があるのでございませう、暫時御茶を上つて居らつしやいと、主人が申します、それで不思議に思つて居りました、私が會津の城の中で寒くもなりましたから、葵の御紋附の胴着に綿の道入つた物を着様と思ひまして、實の佐渡から出ました、單衣物の姿であります、それで城の中は、それを持て來ました所が、大變長くて着られませぬ、刀を抜きまして、真ん中から切りました、それを胴着として居ました、さうして茶を飲んで居りましたが、袖が長いものでありますから、始終袖口が出るのであります、さうすると、寛氏が何を着て居るかといつて見ると、御紋附の着物であります、そんな物を着て、往くと小網町へ上つて捕まつて仕舞う

早く捨て仕舞くといふので早速抜いで御紋附の着物を宿屋の便所へ失禮乍ら捨てた次第であります、さうして待て居りますとトク／＼船も出ませずに、其内十二人官兵が参りました、私が其前に調を受けました時に、何れの者かと問われましたから、野州烏山に親族がおりますので烏山の者だと答へました、所が十二人の官兵が参つて烏山の者の御前か、へいと言つて平身低頭すると、時節柄であるが印鑑なり何なり證明する者を持参して居るか、何一つ御調に對して逃れる様なもの持て居らぬ、私に今日の筆無精であります、子供の時は至つて筆を採る事が好きでありました、随分手帳も軍記帳といふものを拵へまして、佐波ヶ嶋へ往つた事杯が認めてあります、それが紙入の中にある、之を見附かつた時の今迄の苦心が水泡に属すると考へましますから大に心配をいたしました、何かあるかどうかと申すので、實の時節柄でもありますから役場へ出まして成田へ参詣するに付て鑑札を戴かうと思つて烏山の役所へ出ました所が、最早會津も落城して官軍も引上げて居るから、成田へ往く丈けから大した事も無いからといふので鑑札も何も持参いたしませぬ、實は今回江戸へ参りますのは成田へ参りましたに付て江戸へ参らうといふ考が、随

時に起りまじふ、それ故實は鑑札は持参いせしませぬと申開たを致しました、其の
風呂敷包は御前達の、左様と申した中、紙入も遣入つて居ります、商人ふしく
四角の風呂敷包にしました、何も品がありません、紙杯を入れて置きました、
それを調べにありませと紙入がありました、私の兄の紙入は未だに函にありますが
此の紙入の爲に生命が助かりました、紙入に玉が中りまして、種々の書類を打抜き
兼てカスツたものであります、其の紙入があります十分に見られますと困ります
から、平身低頭して居る間に紙入を開けますと、先刻お話し申した會津の高田に居
りました時に私は何の爲めか錦の切れを紙入の中に入れて置きました、紙入の中
から錦の切れが出ますと其の物を手に取りまして向ふで調べて居ります、燈火の
所で十二人の者が色々の協議をして居ります、其間に軍記帳といふものを膝の下
に入れました、御前達どうして持つて居るかこれは私の國で各神社で下さる不淨
除けの守り袋であります、掛け地の守り袋といふものがあります、之は必ず少し
斗りの切れが附いて居ります、さうか成程さう言へば私の守り袋も附いて居る
と言つて幾らか其の辨明も効能があつた、今日の教育のある社會では容易に逃す

事のまゝすまいが、それで無事に済んだ様な次第でさう致しますと、商人であれば何商賈かといふ調がありました。米商を聊か致して居ります、今日の商用でない故に何も商業上の手帳も持参しませぬ、これといふものごとさいませぬと言つて居る間に、先刻申しました通り二丁目の柳屋の支店から五十兩を借りる時に米俵をやつと、其の受取書に近江屋といふ大きな仕切判の押してある書附が一枚ありました。之を出しました所が、大に満足いたしましたと見えて是の大きに御前達を妨げたと言つて十二人の者が歸りました。それから平身低頭いたしました。其晩の船は何せ出ないかといふと、私達が蕎麥屋で嫌疑を受け元服を横にして居つた事でありますから、其人が見へたならば、今日生で居ることは出来なかつたか知りませぬ。外の人が見へたから、それで満足したので、其の難を逃れまして小網町へ無事に着きました。それから日本橋へ尋ねてあそこの藏座敷で二週間居りまして兄の弘道館以来の疵を私が手療治で膏藥を帖るといふ様な話で、笄や小柄を與へまして、二十五兩といふ金を貰ひまして東北へ落ちましたといふ様を次第で、各方面に兄も潜んで居りましたが、不幸にして東京の市川といふ宅で歿しました。私の幸にして

無事で諸所へ轉々して居りまして明治五年になりました。諸藩脱籍の者の本籍へ復する様にといふ太政官の布告を横濱で拜見しましたから、取敢ず國へ戻りまして復籍の手續をいたしました様な次第であります、それで先づ公明正大な人間になりまして私の三男でありますからそれで他に國家に遊す事も出来ず不幸な身であるから、孰れへなり往つて身を立てたゞ祖先へ對する孝行も出来るたゞうといふ事の決心を致しまして、今郷里に居ります私の兄であります、少年の時代から病身であります之に家を託しまして明治六年に横濱へ出まして六年の一月二十五日に亞米利加へ参りました様を次第で、さうして明治十七年に日本へ歸朝しました様な次第でございます、甚だ詰らぬ御話を申し上げます、何かモツと史談會の御参考になる事を申せば宜からうと存じますが、如何せん記憶の儘を御話しますのでありまして、甚だ長く失禮を致しました、(一同、座禮)

